

権力と階級

三 浦 精 一

自然法

ウッドコックもアナルシズムを自然法思想にもとづくものであるといっている。自然法は書かれた法律ではない。それは人間の実践的理性を現実で規制するもので、人間の社会的秩序がそれによって基礎づけられ、それによって反省させられるものである。したがって人間の道徳的意識、倫理観の発達にしがたって、その認識の仕方でも異なるのである。それは人間によって知識される法哲学である。投げ出された存在である人間が、何時とはなしに認識する社会と、その中の個の在り方に関して、一つの法則的なものがあることを意識して、それを探究する所に自然法は成立する。だから、それが法としての効力を持つのは、社会を規制している成文法や、社会的慣習への批判として、実践的理性の形で表現される限りにおいてである。

この自然法思想は、その近代的表現としては、人間の自由と平等の自然権として、一七八九年七月十四日、バスチーユ牢獄の破壊に

始まったフランス革命において、人権宣言の前文に、「フランス国民議會を構成するフランス国民の代表者たちは、人権の無視、忘却または軽侮が、公共の不幸および政治の腐敗の唯一の原因であることを考慮し、厳粛な宣言において、天賦、不可譲かつ神聖な人権を制定し、もってこの宣言が常に社会団体の全員の眼前にあって、絶えず彼等に彼等の権利と義務とを想起せしめるようにすべきこと……」、更にその第一条で「人民は自由かつ権利において平等なものであるとして生れ、かつ生存する……」と書かれているものがある。

これよりも十三年前のアメリカ独立宣言でも「われわれは自明の真理として、すべての人は平等につくられ、造物主によって一定の奪うことのできない天賦の権利を賦与され、その中に生命、自由および幸福の追及が含まれることを信ずる」「いかなる政治形態にしても、これらの目的を害する時は、いつでもそれを変更または廃止することは人民の権利である」といっている。一九四八年十二月十日の世界人権宣言でも「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等にして譲ることのできない権利を承認することは、世界におけ

る自由と正義と平和との基礎である……」といい、日本の憲法ですら「基本的人権」をうたっている。これらすべて自然法思想にもとづく人間の自然権の確認である。

このような思想が単にヨーロッパだけのものでないということ、アメリカの独立宣言よりも前に、安藤昌益が、その『自然真営道』の中に書いている。「万物ごとく相対的に成立する事実を根本の理由とし、いやしくも絶対性を帯びたる独尊不易の教法および政法は皆これを否定し、よってこれらの法による現在の世の中、すなわち法世を、自然の道による世の中、すなわち自然世にむかわしむるため、その中間道程として民族的農本組織を建設し、この組織を万国に普及せしむることによって、全人類社会の改造を達成せしめよう」とした。ヨーロッパが「法」と呼んだものを彼は「道」と呼び、現代社会を「私法の世」とか「法世」とか呼んで「人為的な支配のためのおきて」を否定して、自然の道に帰ること、そしてこれを彼は万国を貫く組織の基礎とすることを考えた。

昌益は孔孟老荘を排したが、彼の思想には老子の大きな影響があることは否定できない。孔孟中心のシナ思想が当時の日本の精神的風土であり、孔孟にあきたらない者たちは老荘に沈潜するといった行き方に反して、昌益は老荘に逃避せずに当時の階級社会の現実を直視した。これは彼が医学を長崎で学び、蘭学を通じて西洋の自然法思想に触れたためだともいわれている。だとすれば、ここにも東洋と西洋との出会があったのであろう。思想には越えられぬ海も山もない。

昌益は孔孟と共に老荘を排したのだが、その老子は「大道すたれて仁義あり」「道の道とすべきは常の道にあらず」「人は地に法

り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」といい、宇宙を支配する自然の法に従って、人為をすてて「無為にして化する」ことを理想とした。この老子の思想はシナ四千年の民衆の心を支配した道教の根本となっており、孔孟の政治哲学はシナ人の表看板に過ぎない。老子の思想は仏教的諦観と共にシナや日本の民衆の魂の底に流れる地下水であり、折にふれて浸出したり、泉となって湧き出るのである。表現の形式や、追及の方法に東洋と西洋の伝統の差はあるが、民衆の魂は同じ一つの自然の道を求めるのである。

ギリシャで一つのまとまった形をもった自然法思想は、キリスト教にとり入れられてヨーロッパにおける自然法思想として結実した。聖アウグスチヌスは、これを「理性第一の規律」と呼び、「国家に対する忠誠は条件つきであり得ない」といい、聖トマス・アキナスも「人が世俗の支配者たちに服従する義務を負うのは、正義の命令が、それを要求する範囲においてである」といっている。正義は自然法の要求であり、国家以上のものである。非暴力的反抗、不服従が、殉教の原理として貫かれたのは、自然への回帰である。ガンジーの運動をつらぬくものも自然法にもとづく正義であった。

理性の優位、権力への反省を含む自然法に挑戦することになったのは「自然に帰れ」と叫んだルソーだったことは皮肉である。ルソーがその『社会契約論』の中で説いた一般意志の神話は、一般意志が単なる多数者の意志ではなく、単一のものとして、人民から発する単一的、優越的、不可分な意志で、常に正しいものだといっている。これによって絶対的君主が、離散的、超越的権力を持つものとして、一般意志の名のもとに君臨する全体主義国家への大義名分

ができたのである。

ルソーに続いてヘーゲルは、その法の哲学において、法を自由な倫理的意志の実現とし、国民国家がその倫理的意志の実現であると見た。国民国家は倫理的な生活の最高の具現であり、国民国家の法は他のいかなるものよりも上位にある。国家の基礎は「意志として自己を実現する理性の力」であるとした。ルソーの一般意志はヘーゲルを介して国家に結合された。ヘーゲルがドイツ帝国に弁証法的完成の理想をつないだことは周知の通りである。マルクスはヘーゲルを逆立させたが、ドイツ帝国の代りにプロレタリア帝国を考えた。これはまた国民社会主義のヒットラー、プロレタリア独裁の共産主義国家への道でもある。

このように一般意志を国家権力、君主、独裁者に結合させたのは、自然法思想、民衆の良知に対する歪曲として現われたものである。自然法は不文の法である。民衆の魂の底に探られる法である。人間が知識し、実践し、反逆し、血をもって書かれる法である。知識の極みまで探められてゆく法の哲学である。自然法思想が展開されるのは人の住む限りの地上に、人の生きる限りの未来にわたる。アナルシズムが深められて、われわれの実践につながる現実も、無限の過去から、未来への一点である。アナルシズムは自然法にもとづく限り、歴史の必然であり、人類の宿命でもある。

共同体、社会、国家、主権

民族と国家を概念的に結合させてヒットラーは、血の純潔と称して異民族を虐殺し、スターリンの前に異見を抱くと見られた者は肅

関係は含まれるものではない。

共同体と混同されやすい社会は、語源的には仲間の意味である。漢字の原意は、二十五家を一社とした一団を指したもので、シナでは原初的には一つの政治的単位だったようである。マリタンによれば、社会が共同体と区別されるのは「社会は人々を共同の目的によって結集する」といった多分に理性的な、意志的なものとしてある。そして社会関係には常に物質的、精神的な目的がある。行われねばならない仕事や、追及されねばならない目標がある。従ってこの関係は知性の活動によって先立たれるものである。会社、労働組合、政治団体などは社会的な機関である。テンニスのゲゼルシャフト（利益社会と訳されている）はこれに近い。マリタンはこの社会の中の政治団体の一部の機能として国家を考えるのである。この政治団体という言葉は政党という狭義の意味ではない。

マルクスは共同体と社会を区別してはいる。民族、国民、教会、階級、家族等のすべての形成物は「社会」ではなく、国家と同じく社会の発展過程から生成した共同体であり、民族感情と国民感情を重視して、彼は民族国家への発展を歴史的必然としている。カウツキーは共同体と社会を混同し、レーニンは「国家は一階級の他階級に対する支配維持のための機関」であるとしている。国家を社会的発展過程の共同体として考えるマルクスと、政治団体の一部の機能として捕えるマリタンの考え方の差に注意しなければならない。マルクスには彼が肯定する権力志向による混乱が見られる。

マリタンが国家を政治団体の一つの機能という場合、この政治団体は一つの目的によって結集し、自律的、独立的な機能を持つ組織体で、国家はその中で一群の制度が組合わされ、国際社会に対して地

清されて民衆は口を閉じて政治を語らなかつた。シナでは紅衛兵が毛沢東と同じに考えることを強要している。日本でも「武士道とは死ぬることおぼえたり」というヒステリー武士道が流行していたことがある。いつの場合でも民衆は最大の被害者で、搾取され、戦場にかかり出され、血を流しながらも祖国を愛し続けている。いつも柔順に権力者の指呼に躍りながら国家が何か、民族が何か、権力が何か、考えようともしない。

ジャック・マリタンはベルゲソンの弟子で、師のベルゲソンに大きな影響を与えたといわれる哲学者である。マリタンは、彼自身も、しばしば混同して使用して来たがと前置きして、共同体と社会について語った。

自然権を持つ人間が形成するのが共同体で、家はその基礎的なものであり、民族はその大きいものである。この共同体が権力を含まないことは当然である。民族は生物学的な面も持ち、言語や慣習といった制約を持つものであるが、生物学的な意味での人種と同じものではない。「共同体は知性や意志にかかわりなく、共通の無意識的な魂（フシケ）、共通の感情、および心理学的構造、共通の風習を造り出す働きをする」とマリタンはいう。

人間はその知性や意志に先立つこの地方的、言語的、民族的な集団である共同体の中に、自分の意志によらず、その中に投げ出されて存在する。地域的に、同じ言語、慣習、伝統に結ばれた民族は人間の環境であり、風土である。これはドイツの社会学者テンニスのいうゲマインシャフト（共同社会と訳されている）に近いものである。ゲマインシャフトは家族関係、近隣関係、友情関係による情緒的な理解、共感的な結合関係で、こうした共同体関係の中には権力

域的な、そして地域に対して総合的な機能をもつ一つの機械である。このような機械が「離散的な、そして超越的に至高なもの——主権」を持つはずはないと、マリタンはいうのである。彼はこのような主権を神にだけしか適用しない。だから、単なる一個の人間ではないか、君主や、政治団体の一機関ではないか、国家に主権を認めることは誤りであり、まして人民にも主権はない。人民は人民が構成する全体に關して、この全体を存在させ、活動させるための完全な自律に対する権利を持つものである。これは主権ではない。人民は自分の誤りを、自分の汗と血で精算しなければならぬもので「責任を問われることのない権利——主権」をもつものではない。自分の行為に責任を持つことは人間の自由を前提としてのみ考えられることである。マリタンもいのように、主権と絶対主義という二つの概念は「同じ鉄床で一緒に製造された」もので、両方とも廃棄されねばならないものである。

神觀念の幼稚な時代には、民衆は無条件に物の中にも呪術にも超自然力を見出した。今でもなお、民衆の中にはこうしたフェティシズムやアニミズムが根をはっている。民衆の易信性から生ずる結合は、政治家、宗教家の指呼に躍る一つの力となつて、ファシズムへの道となる。

権力

日本人は天皇を神聖不可侵の絶対主権者と考えるように教育されて、一億玉碎を誓って戦った。恐ろしい力であった。この絶対主権の信仰が、終戦と共に主権在民の神話に転進して天皇は主権者ならぬ象徴となつた。実にあざやかな転身である。何かしら信じ、何か

に依存せずには居られない人間の淋しさが、この人民主権の神話に
しがつかせたのであろう。デモクラシーのペテンに引つかかって
しまった。選挙権が権利だったら、選挙しないことも権利であるの
に、選挙が義務で、棄権が非国民的所業のように宣伝されて、官僚
や資本家や政治屋の闇取引に、ポカンと口をあいたまま、為すこと
も知らないのが日本人である。上げないという物価が上って実質賃
金が削りとられる。こうしてマイナスになったものはどこかにブラ
スされている。抗議しようとするれば、人民の代表という代議士共が
つくった法律にしばられる。福祉国家という国の福祉予算を分けて
見れば蚊の涙ほどになって一人の精薄児の母の涙は濁く間もない。
防衛予算等は集中的に大軍備となって防衛官は人殺し演習をしなが
ら生活を保証され、災害時にチョッピリ出動すれば讃められる。勤
労の美德を实践した老労働者は中小企業から放り出されて路頭に迷
う。どうも計算が合わない。

デモクラシーの人民主権は代議制度を通じて、ルソーのいう総体
意志となり、権力者への忠誠の誓、服従の義務となる。専政君主
制、独裁制、民主制の政治の差は何処にあるのだ。アメリカの民衆
は民主政府の命令でヴェトナムで無益の血を流している。召集を拒
否すれば投獄される。血税を払って政府や軍需資本家の利益に奉仕
しなければならぬ。ハイル・ヒットラーや天皇陛下万歳とどこが
違うのか。ロシアやシナの政治家共は金と手間をかけて処分せねば
ならない不用武器を供与して、弱者を援助するという美名を国の内
外に宣伝する。笑っているのはメフィストフェレスだけだ。総体意
志の神話が弁証法的発展を遂げる所、正に歴史は生成発展の歴史と
いえるのだろうか。自己に責任を負う者、自然権を持つ者の共同体を

期待する者にとっては、このような歴史的發展はむしろ寂滅下降と
しか映らない。ピラミッドをつくった権力も沙漠に亡び、空前の大
帝国をつくった元もシナ民衆の人海に沈んでしまった。弁証法的史
観は永い歴史の中のミクロの変化に過ぎないだろう。生物学者は便
利だからツエツエ蠅をよく使いはしても、それだけで複雑な遺伝
法則が解けるとは思っていない。

不平等を強制し、実施する権力を、方便としても認めまいとす
るのが、われわれの立場である。方便としても権力を樹立すれ
ば、その周辺に官僚組織、階級制が出来て権力の永続の体制になる
からである。一度こうした機構が出来れば、民衆の血が流され
ないでは絶対に消滅することはできない。現在シナで進行している
文化大革命と称するものも、毛沢東にして見れば、官僚機構を変革
して、真に彼が意図する革命を遂行したかったであろうとも思われ
るが、彼が養成し、彼を支持する者の力が、未だ劉少奇一派の官僚
組織に対抗できる所まで来ていないのであろう。強行すれば動乱に
なるのだ。平和に奪権したくてもそう行かないのであろう。すでに
或程度落付いて、前よりも良くなった生活を続けたい民衆にとって
は、何を今更といたい所もあるはずだ。シナの民衆にとっては、
役人というものは雲の上の存在でしかない。国家意識や民族意識に
養われたのは一部の若い者で、その連中は皆役人になり上っている
のだ。

朝鮮でも、ヴェトナムでも民衆は資本主義国家と共産主義国家に
よって二分されて、親子兄弟までも国籍と国境で隔てられている。
国家の背景もなく外国で嘗々として働らく華僑も、常に献金を強要
される国家権力の被害者である。ヨーロッパで王権が伸長して国境

が確定された時、最大の被害者となったのはホヘミアンだったと、
エリゼ・ルクリュはいつている。この旅行民族は、人間や動物の病
気の治療法を知っていて、葉草や、他国の物産、ニュース、歌や踊
をもって村から村へ、国から国へまわっていた。村でも町でも歓迎
され、愛されていた。しかし権力者が国境を固めた時、このような
インタナショナルな民族はスパイと呼ばれ、浮浪者と呼ばれて締め出
された。ジブシーもユダヤ人も同じ運命を負わねばならなかった。
ヒットラーは民族の純潔と称してユダヤ人を虐殺した。権力者は猜
疑する。人を見たら盗人と思うように教育するのは商人だけではな
い。頼朝も家康も毛沢東も権力のためには閉鎖的になる。シナに大
きな漢帝国をつくり上げた高祖も宦官の膝の上で淋しく死んだ。安
藤昌益は聖王を万悪の本といい、ワイルドも、王国と群集を分ける
必要はない。すべての権力は等しく悪であるといっている。

権力はこのように、国家主権を頂上に国家のピラミッド型の階級
構造をふまえている。会社にも官庁にも同じような構造ができてい
て、官僚制は政治機構の中心である。この権力や権力機構について
は社会学的に、心理学的に更にまた歴史的に研究されねばならな
い。

アナルシズムは反権力の思想であるといわれる。アナルシズムが
根本的な点での人間の解放を目指す思想だからである。人間の自由
が、有形無形の束縛や抑圧に歪められている現実を直面して、真の
解放の意味と手段を追求し、実践するということは、必然的に権力
への批判から、権力への反逆、権力の廃止に進まざるを得ないのが
当然だからである。自然法について最初に触れたのも、人間を支配
すべき真実の法は何かの間であり、平等であり自由である人間の自

然権を侵害する権力について抗議するためである。

権力が存在するのは、すべて他との関係においてである。人の上
に行使する人の力、支配力として始まる。人間の知性の程度が低い
時、他に依り頼もうとし、依存の代償に使役を甘受する。頼まれた
者は自分の力に驚いたり、自負したりして支配と隷属の関係は出
来上るのであろう。こうした依存関係はアニミズムとしても、超越
神への信仰としても現われる。いずれにしても横に手をつなぎ暖め
合う関係を上下にしたものである。上下関係でも一つの無形の超越
神だけに抽象された場合は、大して問題にはならないが、人間が神
の位置に座することは階層的な形成を伴う権力機構になる。年令
差、知能差、体力差もこうした階層を生じやすい。自己の責任、自
由、平等への知性の未発達産物であることに相違はない。宗教を
否定する共産党と創価学会が共通するものを持っているのも、権力
中心であるためである。単純な宗教否定や科学万能主義は単純な宗
教と共に人間の易信性につらなる盲信的態度となり易く、権力者に
利用される。これがファシズムの地盤でもある。「毛沢東語録」を
ふりかざして七億の民衆に「一つの毛思想」を強要する少年ファシ
ストを見よ。日本で思想統一を目指して教科書統制のためにあらゆる
手段を弄しようとする文部省も、現在の、官僚デモクラシー制の
権力の座の安定を願う愛国心によるものだろう。

われわれが真に必要とすることは、こうした政治家、学者、宗教
家たちに躍らされない科学的態度である。石川三四郎さんは初対面
の私に「偏見を持たないこと、それがアナルシズムだ」といった。
偏見を持たずには居られない人間の弱さは知り過ぎるほど知っている。
しかし、少くとも馬鹿正直の科学的方法を採る態度だけは持ち

ス・レーニン主義の空想的一面である。彼等がその権力主義と階級主義とを捨てない限り、彼等が自己の非をかざるために、アナリズムを空想呼ばわりをして、大衆をゴマカす以外に方法はないのだ。

権力や階級は人間性の迷蒙や矛盾に根ざす原罪的な悪で、最初から否定すべきものである。政略的にでも、一時的にでも、これを肯定すれば、理論的な破綻や行詰りが生ずるのは当然である。経済的にだけ階級を限定したマルクスは利口な男である。権力のある所必ず階級は生ずる。そしてマルクスはルンペン・プロレタリアをプロレタリアの中から除外する。無階級と称しているロシアの現実も、下層以下になお、非協力農民、乞食、売春婦、闇ドルブローカーなどがあつて階級外の不思議な階級を形成している。ロシアの労働賃金格差はアメリカ以上であり、高級官僚、高級技術者、將軍、警察のボスたちの豪華な生活は世界周知の事実である。バクーニンはマルキストに疎外された民衆の中に、汚れない魂を見出し、革命の原動力を見出している。大杉栄も民衆の中の微小な存在が満たされない政治に抗議した。

階級を現実、実在するものとして捕えることが科学的態度であつて、経済的に限定する非科学的歪曲は、われわれの採り得ない所である。クロボトキンは、その「近代科学と無政府主義」の結論で、無政府主義は自然科学の帰納演繹法によつて得られた綜合を、人類の制度の評価に適用する試みである、といっている。帰納演繹法については哲学的には議論があるにしても、科学においては、これ以外によるべき方法は未だない。これは馬鹿正直な方法である。クロボトキンはその科学的良心の必然的結果としてアナリズムを

把握し、この方法を人類の制度に向けて現実の社会を批判すべきであるとするのである。

こうした立場から現実の階級を捕えようとする場合、われわれがそこに見出すのは、国家の組織または制度としての階級の外に、財産、職業、教育、生活様式、教養、習慣、伝統などに結合され、上品、下品、高尚、俗悪、礼儀正しい、粗野である、といった情緒的、感情的なものを伴なっている。そして一つの差別的な意識を伴っている。もちろんこれらは一括して階級概念としての輪廓を持つていない。人種差別の概念も複雑に階級概念とからみ合っている。それは階層性につらなる「差別」として客観性を持つ社会的な実在である。人間はこうしたものの入り組んだ環境の中に生れる。投げ出された存在であつて、契約によつて差別されているのではない。

常識的に階級と呼ばれているものをとり上げて見ても、金持階級、貧民階級、有産階級、中産階級、所有者階級、無産者階級、といった財産にもとづくもの、労働者階級、農民階級、商人階級、職人階級、自由業階級などの職業的なもの、上流階級、下層階級、教養階級、無教養階級、学者、貴族、平民、熟練者、未熟練者、有識経験者、新参、古参、年令、学校の上級、下級と実に色々なものがあり、それが分化したり、統合したり、また上昇、下降、異動がある。客観的に見れば、ほとんど輪廓のはっきりしないもので、主観的に見る人々の中には年令や新参、古参、学級の上下以外に階級は無いという者もいる。

われわれが階級を悪とするのは、このような年令や時期の差によつて生ずる必然的なものを意味するのではないことは勿論である。こうして沢山並べたものの中で、その中を貫く一つの社会的な、歴

史的な色づけをされ、権力者によつて、権力の基盤として必要なものとして維持される制度としての階級と、その裏づけとなる觀念を見出すことができる。アンリ・バリユックもいうように共同生活体の中で、権力者によつて変更された善悪の規準にしたがうもの、本質的な正、不正にもとるものとして、人間の社会に存在を続けている階級であり、権力の土台となり、支柱となっているものである。前にもいったように、権力のある所必ず階級があり、その階級は権力からの遠近によつて様々に、一つ一つの網の目として形成されているものである。

民衆は知っている

権力、階級について学問的な研究が行われねばならないと、度々いったが、こうした考え方をする上で、気をつけねばならないことは、現在、学者、学閥があり、社会運動においても、学者や知識への指導階級ができており、この連中がエリートとしての階級をつくっていることである。この事実、この傾向は権力につらなるものだというのである。こうしたものは「在り方」として、階級形成に進まず、すなわち権力を目指す組織を支持する一階級としてでなく、社会的な分業概念における一グループとして存在すべきものである。学問は決して権力の召使ではないという学本来の使命に立つて、権力へでなく共同体への分業的参加であるために、学の自由が守られねばならないのである。学者が権力を認めることは、その権力からの遠近によつて一つの階級に固定されることになる。

バクーニンも認めたように、マルクスは立派な学者であつた。バクーニンはマルクスの権力主義に抗議した。江口幹君の立派な訳で

出たダニエル・ゲランの『アナリズム』の中から引用して見よう。

バクーニンは、マルクスの知的能力には大いに感嘆して、その最大の著作『資本論』をロシア語に訳しているし、唯物史観には完全な同意を示している。彼は、プロレタリアートの解放へのマルクスの理論的貢献については、誰よりも認めているのである。しかし、知的な優越の故に労働運動の指導権を握り得るということは、彼には承知できない。最も知的であれ、最も善意を持っているにせよ、ある特定の人びとのグループが、すべての国ぐにの革命運動とプロレタリアートの経済組織との、思想となり、中枢となり、指導的な統一の意志となり得ると主張することは、マルクス氏のように聡明な人が、どうしてそんなことを考えたのであろうと思われるほど、常識や歴史的経験に反する邪説である。……世界的な独裁制、ちようど機械を動かすように、すべての国の大衆の蜂起的活動を調整し操縦する、いわば世界革命の技師長としての仕事を果たす独裁制をうち立てること……そのような独裁制樹立は、ひとえに革命を殺し、すべての大衆運動を麻痺させ歪曲するのに、彼としては十分なものなのであろう。……そして革命のためと称して、全文明社会のプロレタリアートに、独裁権力によつて任命された政府を強制している国際会議については、どう考えたものであろうか……

すべての労働者が学者になることはできないというのが学者やマルクスやその他の言分である。それは当然だ。だから学者が必要だが、学者が学者としてでなく、エリートとして指導者として、権力者として存在すべき理由はどこにもない。自分を誤ってはならない。

社会思想は、学者によって裏付けはされたが、発生したのは庶民の平等と正義の要求からである。旧約聖書にも、知者の知を空しくするものとして民衆の知を示している。数千年の庶民の血の要求は、宗教經典の中に生なましく伝えられている。無神論を唱える学者がこれを隠蔽し、歪曲している。宗教が時と共に権力、金力に妥協して変形していることも事実である。しかしその宗教の中の庶民の逆や血の要求に、今もなお庶民はしがみついて、神の正義を求めている。庶民の魂に共感するものが宗教の中にある以上、高所から宗教は阿片だと説教しても民衆は聞きはしない。権力主義思想家の指呼に躍って、単純な宗教否定をするのは誤りである。その中の古来からの民衆の声をきくと共に、学の対象としての宗教研究が行われねばならない。シャカも親鸞も、聖フランシスも乞食坊主となって民衆の中に入ってしまった。民衆はその中に入ってくる者を捨てはしない。一緒に泣き、一緒に笑うのだ。民衆から遠のけば民衆も去る。民衆をはなれたエリート意識や階級意識を捨てねばならない。大杉も民衆の中に入ってしまった。バクーニンは民衆と共に叛乱した。

民衆は数千年にわたって支配階級の汚辱を身に浴び、圧迫されて歪められ、不純な相貌すらもっている。被害者である。レヴィ・ブルユルの融即の法則を適用せねばならないような面さえ持っている。この民衆を、バクーニンや大杉が「民衆はよく知っている」という時、またマルクスの枠からハミ出したルンペン・プロレタリアの中に革命の原動力を期待したのは、何を民衆の中に見出しているのであろうか。民衆の汚辱の姿の中にバクーニンの澄んだ眼が捕えた真実は何か。

若かった頃、小使だった一老人が私に語った。吉原では、自分の馴染の女郎が休んでいる日に行った時、代りの者は来るが、休んだ仲間への義理で決して自分を客にとらないと。吉原では外部の社会の富や権力、一夫多妻の風習とは別に、一人の女の貞操は考えられていた。曲りなりにも平等の原則も見出せる。こうしたところに民衆が本能的に知っている正義があるのではないかと考えた。釜ヶ崎の民衆も私服の警官には、それと知っていても反撥せず、制服には反撥する。権力の象徴に親愛感を覚えるほど歪められていないのだ。こうした事例は民俗研究の中で豊富に見出せる。民衆は知っている。そして承継している。この民衆の魂の底に倫理の法則、社会学的仮説を探るのは学者の仕事である。人類学者は未開民族の中に、人間の姿を求めて入ってしまった。そして黒く考えねばならないことを学んだ。ルクリュもクロボトキンも、その学の方角はここにあった。

われわれが、人間の自然権といい、民衆は知っているというのには、社会の底辺をマルクスのように疎外せず、それをくるめて「人類」の正義を求めらるからである。パスカルが皮肉ったように川のこちらとあちらで違う正義ではなく、海の彼方の民衆をもつらぬく正義である。権力とその基盤である階級を否定するのはこのためである。